

氏名	こ ばやし ごと 小 林 剛
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 239 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻
学位論文題目	トマス・アキナスの天体論 ——仮説と不可滅性——

論文調査委員 (主査) 助教授 川添信介 教授 内山勝利 教授 片柳榮一

論 文 内 容 の 要 旨

古代中世の西洋思想史において天文学をどのような学知と見るかについては主に以下の二つの立場があったように思われる。一方の立場の人々は天文学を幾何学であると理解した。このような立場を非実在論的立場と呼ぶことにしよう。たとえばプラトン、エウドクソス、カリッポス、アリストアルコス、アポロニオス、プトレマイオス、プロクロス、マイモニデスなどがこのような立場を取った人々である。もう一方の立場の人々は天文学を自然学の原理に基礎付けられるべきものと理解した。このような立場を実在論的立場と呼ぶことにしよう。たとえばソシゲネス、ジャービル・イブン・アフラフ、イブン・ルシュド（アヴェロエス）などがこの立場を取った人々である。一般的には以上のように理解されている思想史の流れのなかで13世紀ラテン世界のトマス・アキナスはどのように位置付けられるであろうか。アキナスによれば天文学とは数学の原理を自然学の対象に適用する、数学と自然学との中間の学（*scientia media*）である。そして諸々の既存の天文学説は様々な数学原理を様々な仕方で自然学の対象たる天体に適用する。しかしこれらのうちのどの原理をどの仕方で適用しなければならないというようなことはない。つまりどの既存の天文学説も真であるとはかぎらないという意味で仮説（*suppositio*）である。だがアキナスはこのような真であるとはかぎらない既存の天文学説を真であると仮定して、それに自然学的あるいは形而上学的真理を適用して根拠付け、自然学的仮説を立てる。つまりアキナスは、数学の或る原理を自然学の対象たる天体に或る仕方で適用することが可能であるということを自然学的あるいは形而上学的に根拠付けるのである。このようなアキナスの立場は、天文学を自然学的あるいは形而上学的原理で根拠付ける点で、天文学をめぐる上述の二つの立場のうちどちらがといえば実在論的立場の方、すなわち、天文学は本来自然学の原理によって基礎付けられるべきであると理解する立場の方であるように思われる。しかしこれだけではアキナスの立場の独自性は明らかではない。というのも、上述のようにアキナスがなした天文学的自然学的仮説の定立は既にアリストテレス自身がなしていたとも解釈できるからである。そこで論者は、天文学に関するアキナスの立場の独自性をできるかぎり明らかにしようとする。そしてそのために本論文では、アキナスの自然学によればそもそも天文学は真であるとはかぎらないのはなぜなのか、つまり、なぜ仮説なのかという問題に焦点が当てられることになる。

まず、第一章「離心天球・周転円説」では、アキナスの自然学によればなぜ天文学は仮説であるのか、その根拠が、プトレマイオスに代表される離心天球・周転円説がアキナスの自然学において可能な仮説である理由を考察することを通して明らかにされる。Th. リットは「アリストテレス自然学のいくつかの基本的な原理がプトレマイオスの理論によって危険に晒されていることにアキナスは気付いていないように思われる」とし、また J. ワイシャイプルは「全てのスコラ学者が実感していたように、アリストテレスとプトレマイオスが単一の学知の領域において両者とも正しいことは不可能である」と述べる。この両者の解釈は一面で対立的であるが、プトレマイオスの離心円・周転円説がアリストテレスの自然学によれば不可能な説であると解釈する方向性では共通する。それに対して、論者は離心天球・周転円説がアリストテレスに依拠したアキナスの自然学において可能な説であることを、以下の理由によって示す。確かに離心天球・周転円説はアリス

トテレスの自然学によれば、また、それに依拠しているアキナスの自然学によっても不可能な説であるようにも見える。というのも、人間の認識の及ぶ限りでは天体の運動は全て宇宙の中心を中心として回る運動でなければならないのに、離心天球や周転円において存在する惑星の運動は宇宙の中心を中心として回る運動ではないからである。しかし、アキナスの自然学によれば、天体の運動は人間によって確実に認識され得ない事象である。だから、人間の認識が及ぶ範囲を超えて端的に考察すれば、天体の運動は必ずしも宇宙の中心を中心として回る運動でなければならないわけではない。それゆえ、離心天球や周転円において存在する惑星の運動が宇宙の中心を中心として回る運動ではないことは可能なのである。したがって離心天球・周転円説はアリストテレスに依拠したアキナスの自然学によれば可能な説なのである。ところで、アキナスの自然学によれば天体の運動が人間によって確実に認識され得ないのは、天体が不可減な物体だからである。すなわち、人間の固有認識対象である可減的な月下の物体よりも天体がより完全な物体だからである。また、離心天球・周転円説を含めあらゆる既存の天文学説が仮説であるのも人間の天体認識が不確実だからであり、天体が不可減な物体だからである。この点で、アキナスの思想はプロクロスやマイモニデスの影響を直接・間接に受けた思想であると思われる。ただし上述のように天文学を非実在論的に理解するプロクロスやマイモニデスとは異なり、アキナスはあくまでも天文学を自然学の原理で基礎付けられるべきものと理解する実在論的立場を堅持する。そして人間の天体認識の不確実性も、天体の不可減性という自然学的形而上学的原理によって根拠付けるのである。アキナスの立場は天文学の仮説性を強調する実在論的立場なのである。

次に、第二章「自然学的必然性の根拠」では、アキナスの自然学によれば天文学はなぜ仮説であるのか、その根拠が、もし仮に自然学自体が仮説であるとするならばその根拠は何なのかを検討することを通して明らかにされる。アキナスの自然学において、天文学が仮説である根拠は天体が不可減な物体であることであるという第一章の主張には反論が可能であるように思われる。なぜなら不可減な物体である天体だけでなく可減的な月下の物体をも対象とする自然学自体も、天文学と同じように、仮説であるようにも見えるからである。自然学が仮説であるようにも見える理由は以下の通りである。自然学における必然性は、大部分存在する (*ut in pluribus/hôis epi to polu*) けれども一部存在しない (*non in minori parte*) ものを存在すると前提して (*ex suppositione/ex hupoteseôs*) 成立する。アキナスの用いる例によれば、たとえばオリーブの種があって他の条件がそろっている場合大部分オリーブの実は成るが、オリーブの種があって他の条件がそろっている場合でも一部オリーブの実が成らない場合がある。しかしオリーブの実がなっていると前提すればそこには必ずオリーブの種やその他の条件があるはずである。このように自然学の必然性は、大部分存在するけれども一部存在しないものを存在すると前提して成立するのである以上、自然学自体も仮説であるようにも見える。だから、天文学が仮説である根拠は天体が不可減な物体であることではないようにも思われる。しかし、アキナスの自然学によればやはり上述の通り、天文学が仮説である根拠は天体が不可減な物体であることであると、論者は以下の理由によって主張する。たとえ仮に自然学自体も仮説であるとしても、それは天文学が仮説であることとは根拠が異なる。両者の根拠は或る意味では全く正反対のものである。天文学が仮説であるのは上述の通り人間の天体認識が不確実だからである。つまり、人間知性が不完全性を有するからである。しかしもし仮に自然学自体が仮説であるとしたらその理由は、大部分存在するものが一部存在しないからである。そして、大部分存在するものが一部存在しないのは、天使が不完全性を有するからである。アキナスの自然学によれば、全ての物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けるのは天体の動者たる知性実体すなわち天使である。しかしその力はあらゆる場所に及ぶとは限らないし、その意志が、あらゆる場所に力を及ぼしている神の意志と一致するとも限らない。そしてこの二つの限界こそが、大部分存在するけれども一部存在しないものの反面、すなわち偶発 (*casus/automaton*) の根拠となる。このように、大部分存在するものが一部存在しないのは天使が不完全性を有するからなのである。以上のように、天文学が仮説である根拠が人間知性の不完全性であるのに対して、自然学が「仮説」である根拠は天使の不完全性なのである。では、アキナスの自然学によれば、なぜ天文学が仮説である根拠は天使の不完全性ではなく人間知性の不完全性なのであろうか。それは、そもそも天体には、大部分存在するけれども一部存在しないもの、およびその反面である偶発がないからである。ではなぜ天体には偶発がないのか。それは天体が不可減な物体だからである。アキナスの自然学によれば天文学が仮説である根拠はやはりここに極まるのである。

最後に、第三章「天体の不可減性」では、アキナスにおいて天文学の仮説性の根拠である天体の不可減性をめぐって、

三つの形而上学的問題が検討される。天体は不可滅な物体であるという理解はアキナスにおけるその他の諸々の形而上学的理解、すなわち、可能態に在るということ、質料を有するという、個別化されているということといった理解と両立し得ないようにも見える。しかし、これらは全て見かけ上の問題に過ぎないというのが論者の主張である。アキナスによれば、不可滅な物体である天体の質料において、実体形相に向かう可能態は存在だけに向かう可能態である。そして、このことは全ての可能態は存在と非存在・欠如との両方に向かうと言うアリストテレスの形而上学的理解と両立し得ないようにも見える。しかし両者は両立し得る。というのも、アリストテレスが現実態と可能態との複合と実体変化とを認める以上、可能態は、違う現実態に向かうのに従って相異なることを認めなければならない。そこにさらに、実体変化するものとしなないものと認めるならば、すなわち、可滅的なものとともに不可滅な物体をも認めるならば、可能態には、存在だけに向かうものと、存在と非存在・欠如との両方に向かうものがあることを認めねばならないからである。また、不可滅な物体である天体の質料において、異なる場所に向かう可能態は存在と非存在・欠如との両方に向かう可能態である。しかし、天体の質料における、実体形相に向かう可能態も、異なる場所に向かう可能態も、質料の可能態としては不十分である。というのも、前者は、存在だけに向かうので、天使などの知性実体、すなわち非質料的実体の可能態と同じである。後者は、付帯性に向かうので、現実態において存在する基体の、付帯性に向かう可能態と同じであり、純粹可能態であるはずの質料の可能態とは異なるからである。確かにその通りである。だが、アキナスによれば、天体の質料とは、天体の実体形相と、異なる場所との両方に向かう可能態に在り、異なる場所に向かう可能態に在るかぎりでは存在だけではなく非存在・欠如にも向かう可能態に在るものである。そしてこのように在ることが質料であることの最低条件である。だから天体の質料の可能態は質料の可能態として十分なのである。さらに、不可滅な物体である天体においては一つの種に一つの個物しかない。というのも、天体の実体形相は、それに向かう質料の可能態全体を完成する。だから、一つの形相と、それに向かう質料の全体との複合から成る個物は必ず数的に一つでなければならないのである。しかし、天体も物体である以上、「この」質料が形相を受け取って個別化し、一つの種における複数の個物の間の相異性を生み出すはずであるようにも見える。だがそうではない。というのも、一つの種における複数の個物の間の相異性の始原としての質料は延長の延長性自体によって相異性の始原なのである。だから、「この」質料が形相を受け取って個別化するということが一つの種における複数の個物の間の相異性の必要条件ではあっても十分条件ではないのである。

このようにアキナスは自然に関する人間の或る認識の限界を、自然に関する人間の他の認識によって根拠付ける。アキナスによれば、自然に関する人間の或る認識、とりわけ天体認識には限界があり、この認識を超えた自然に関する人間の認識があり得る。例えば離心天球・周転円説などがそうである。そしてこのことは自然に関する人間の他の認識、具体的には天体の不可滅性の認識によって根拠付けられる。また、自然学上の第一動者すなわち天体の動者たる天使の力には限界があり、それを超える自然への作用者、すなわち神が存在する。そしてこの認識も自然に関する人間の他の認識、具体的には、大部分存在するけれども一部存在しないもの、及びその反面である偶発の認識と、第一動者に関する諸々の自然学的形而上学的考察によって根拠付けられる。さらに、天体の実体としての在り方と、それと同じである天使の実体としての在り方とには限界がある。すなわち、天体と天使の実体は、非存在・欠如に向かう可能態は有さないが、存在だけに向かう可能態は有する。そして、このような在り方を超える実体の在り方、すなわち神の純粹現実態が存在する。この認識もやはり自然に関する人間の他の認識、具体的には天体に関する諸々の形而上学的考察から根拠付けられるのである。つまりアキナスは人間の自然認識の限界を月下の物体と天体との区別や、天体と天使の区別や、天使と神の区別というような、自然に係わる形而上学的「階層性」についての人間の認識によって根拠付けるのである。この認識自体は確固たる認識として認められ、自然に関する人間の他の認識全ての基礎となっているのである。

論文審査の結果の要旨

地上を遠く離れた天体の世界は、今日でも何らかの意味でそうであろうが、とりわけ西洋の古代から中世という時代には、何か特別な存在とみなされ、われわれの生きる世界を全体として把握しようとする哲学的営みにとって重要な課題であり続けていた。本研究は盛期スコラ学の大家トマス・アキナスが、哲学者としてこの天体をどのような存在としてとらえており、その天体論が歴史的にみてどのような特徴を持っているのかを明らかにしようとしたものである。この論点は、少なく

ともわが国のアキナス研究において、十分に注意が払われてこなかったし、海外においても基本的には同じである。確かに、純粋に科学史的研究領域においては、アキナスの天体論はそれほどの重要性を持たないであろうが、より広く形而上学的・存在論的な視点、さらには天体に関する知識の身分を問う認識論的な視点からすれば、彼の天体についての理論は検討に十分値するものである。

本研究の意義は、まずもってこのような視点からアキナスの天体論を本格的に論じた点にある。特に、天体について人間がもつ知識の「仮説性」、つまり可能ではあるが十分な意味で真理であるとは認定されない説明理論であるという特質に注目した点は、特筆されなければならない。また、アキナスの浩瀚な著作を広く渉獵し、原典テキストを精密に分析した上で、一貫した解釈を掃示しようとする論者の姿勢は研究者としての優れた能力を示すものである。本研究は多くの重要な成果を提示しているが、その主要なものとして以下の諸点を挙げるができるであろう。

1) 離心円・周転円説はアリストテレス自然学と原理的に調和しないのであるから、アキナスがこの説を仮説としてであっても十分な考察の対象としていることは、これまでのアキナス天体論の研究においては、理解しがたいことと見なされてきた。それに対して、本研究はその第一章において、天体の不可滅性というアリストテレスに依拠した形而上学的・自然学的見地からすれば、離心円・周転円説も仮説としての十分な可能性がアキナスによって容認されていることを示したことは、あらたな解釈として今後のアキナス研究にとって大きな意義を持つものと言える。

2) この新たな解釈は、離心円・周転円説が仮説として容認されていることを明らかにしたのと同時に、天文学上のアリストテレスの同心円説もやはり仮説であることをアキナスが認めていたことを明らかにしている。形而上学や倫理学の領域ではアリストテレスとアキナスの立場の相違は従来から研究されて明らかになっているにしても、天文学においても両者の基本的な相違が存在することを明確にしたものとして、本研究は重要な貢献をしたものを見なすことができるであろう。

3) 第二章で論者は、天体の領域ではない月下の世界における「偶発」という厳密な必然性を欠いた現象の存在を問題にし、その最終的な根拠が天体の動者である知性実体（天使）の不完全性に求められている。この論点はアキナスの天体論と形而上学との連関という、概括的な意味では従来から承認されていたことであるとはいえ、具体的な仕方ではこれまで明示されてこなかった論点である。この偶発に関する分析結果との対比をつうじて、天体認識の仮説性の意味を明晰にしたことは本研究の大きな成果であると言えるであろう。

4) 第三章の天体の不可滅性に関する形而上学的分析についても、一般にアリストテレスの基本的な概念枠組みに強く依拠していると見なされているアキナスの立場が、天体の質料やそれによる个体化といった問題において、アリストテレスの立場を否定しないにしても、それに収まりきれない観点を含んでいることを明らかにするものとなっている。この点で本研究は哲学史研究として優れた成果をあげていると評価できるものである。

以上のように本研究は哲学史研究上の重要な成果を出したものであると言ってよい。しかし、アキナスの天体論の持つ内在的で哲学的意義については、それをどのように評価するのかという視点が本研究には十分には認められない。天体に関する理論の仮説性がアキナスにおいては単に数学的ではなく実在的性格を持つと主張されているが、そのことが例えば近代科学の仮説性とどのような関係にあるのかといった考察が、本研究の意義を高めるためには必要であったと思われる。また、あくまでアキナスのテキストそのものに語らせようという姿勢が強いために、叙述がやや生硬なものとなっており、論者の見解が読み取りにくいものとなっていることも惜しまれる点である。とはいえ、これらの点が哲学史研究としての本論文の価値を著しく損うものとは言えない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成15年1月16日、調査委員3名が論文内容とそれに関連したことがらについて口頭試問を行った結果、合格と認めた。